
ラブカクテルス その6 5

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その65

【Nコード】

N3272E

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は自分を見直すにはぴったりのカクテルです。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフイズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は満員御礼でございます。

ごゆっくりどうぞ。

俺の仕事はこのホールに来る客の誘導整理員だ。

今日も忙しい一日が始まる。

きつといつもの如く残業だろう。

ヤレヤレだ。

このところヤケに客が慌ただしく入って来ては、ここから出ていくまでの時間が掛り過ぎる。

確かにこのホールもかなりの古い。

老朽化が一番の原因なのだとはい誰かが知っているのだが、それを直すとなると、やはりオーナーがそうすると言い出さない限りはこのままだ。

面倒くさいのか、暇がないのか、こつちには迷惑な話だ。

その内ここが壊れて動かなくなったら、困るのは自分なのに。

そうこうしている間に今日一番の客がやって来た。

俺達は大きい声で客を出迎える。
いらっしやいっ！こちらへっ！

客は朝から赤い客だった。

全く好きだな。

みんな顔には出さないが、そう思っているに違いない。

俺は、一番左側から詰めて並んでくれるように、丁寧かつ、元気良く客を促した。

ここに来る客は、荷物と書類を持ってやって来る。

二つある入り口から入ってきた客達は、このホールから出口の手前にあるゲートに向かい、そこで審査を受けた後、その荷物と書類を置いて出口のドアから出ていく。

ただそれだけのことなのだが、その客の量ときたら半端ではないのだ。

何百と収納できるこのホールでさえ、あっという間にパンパンになる程の客入りだ。

俺達は少しでもそれがスムーズに進むように誘導する。

客は色でくぐるゲートが違う。だからその列に色別の客を並ばせ、尚且片寄りができて客がホールの中に入れないことがないように、まんべんなく客を捌くのが俺達の仕事だが、もうここで長い事同じ仕事をしているからトラブルなどはそれほどない。

いや、癖が悪い客が大量に流れ込んできたときは、やはりトラブルにはなる。

そんな時に客がこちらの言う事をあまりにも聞かずに、中にはひどく暴れる物まで出ると、そんなときは非常スイッチを押して粗方タチが悪いのはホールから押し出したりもする。

そんなことは、少し前まではしょっちゅうだったが、今はオーナーがある程度規制を掛けるので滅多にない。

まあ、残業はあるものの、あれと比べればマシな方か。

俺達は次々と入ってくる客達を、今朝も軽快に列へ送る。

朝は大した数の客が来る訳ではないので割かし楽な方だ。

客も白と緑と茶色、そして赤がほとんどで、作る列の数も少なくて済む。

客達は書類と荷物を順調に提出し、出口の扉を出ていく。そろそろ客もまばらになってきた。一段落着けそうだ。

朝は装置の動きがかなり鈍い。

客の量が少なくても、並んだ客がハケるのは、やはりそれなりに時間に係る。

俺達は、そんな客達を気長に待ち、空いてきたところで代わる代わる交代での休憩に入った。

みんなは口々に、客に対しての愚痴などを言い合っ。

そしてオーナーへの愚痴などもそうだ。

この頃の客層を見ていると、不安でならない。

ホールを囲う倉庫も、つい最近増設したばかりだが、メーターを見ると、もうスペースは一杯に近い。

確かに処理する装置なんかも、聞くところによると、かなり痛んでいて、ひどく無理をして稼働させているようだ。

取り込むよりも貯まっていける方が多くなるのは仕方ない状況らしい。しかも荷物の中身が片寄り、倉庫からなくなかならないのも原因の一つと言えるようだ。

必要ないものが溜まり、必要な物が欠けている。そんな現状はもうここ何年も続いている。

昔はそんなじゃなかった。

そんな懐かしい昔話をするのも、ここ最近回数が増えてきた。

しかし確かに昔、オーナーがまだ坊っちゃんだった頃は客も大人しく、礼儀正しい素直な物ばかりだった。

このホールもまだピカピカで、残業などはあり得なかった。毎日のように仲間達もやって来ては、手伝いもしてくれた。

今となっではいい思い出だ。

俺達は一生続くこの仕事を誇りに思い、オーナーと命を共にする覚悟だが、オーナーはどう考えているのだけ。

憂鬱な話題で盛り上がっている内に、そろそろ昼の客達が来る時間となってきた。

俺達は休憩を終わらせ持ち場に着くと、それを待っていたかのように客がナダレ込んできた。

俺達はまた気を取り直し、威勢の良い声をあげて誘導し始また。やはり赤い客が目立つ。

赤のゲートの前はたちまち長い行列ができた。

俺達は予想していた状況に慌てることもなく、冷静に行動した。しかし。

俺はやはりこの状況が大丈夫なのかを心配せずにはいられず、少しソワソワしながらその行列の背中を眺めた。

赤いゲートの上の通過可能を示すランプは忙しく点灯を繰り返す。それがこの頃俺には悲鳴のように見えてならなかった。

かなりの量の客が入り乱れ、混雑したホールは押すな押すなのギューギュー詰めになって、いよいよ最盛期となった。

一時は俺達の居場所さえきつくなり、息をするのも必死だったが、まあ、毎度の事ではある。

しかしそうになると、もう終わりが近いという合図でもある。

俺は辛抱して、客がうまく流れるのを待った。

すると、何やら前の方で騒ぎが起きているようだった。

こんな時は厄介だ。

俺は凄い数の客を掻き分けて、もみくちゃにされながらもゲートの近くまで行った。

そして騒ぎの原因が、どうやら相性の悪い物同士が隣合わせになったため、イザコザとなっていたのだとわかった。

俺は双方の間に入り何とか引き離そうとしたが、なかなか離れようとしてくれず、もし両者がくっついて違う色にでもなったら、なお厄介になる。

後から駆けつけた仲間の協力も得て、何とか俺達はそのトラブルを回避し、客達の同様にだめて落ち着かせることに成功した。

危ないところだった。

非常スイッチを押すことも考えたが、取り押さえたままの自分達も持っていかれてしまうことを考えると、ホールはしばらくテンヤワンヤになる。

クワバラクワバラ。

時間を見計らって、ホールに広さが戻ってきたところで、問題の客を少し間隔を開けて俺は誘導し、とりあえずその場は収まった。ゲートの通過も順調になって、ホールには平穏な空気が戻った。俺達は休憩に再び入った。

しかし久しぶりの客トラブルで少しくたびれた俺は、少し歳を取ったと冗談を言っておどけて見せたが、まんざら嘘でもなかった。腰を下ろして寛ごうとしたそんな時に、仲間の一人が妙な事を言い出した。

皆は考えたことがあるか？あのゲートを潜った先に何があるのかを。

俺はそんなことを一度も思ったこともなかったので、そういえばそうだな、の話題に少し首を突っ込んだ。

ある仲間は自分の想像に任せて、好き勝手に面白い事を言う。

きっと、ゲートの向こうにもゲートがあって、そしてそのゲートの向こうにもゲートがあり、それがずっと先まで続いているんじゃないか？とか、ゲートを出ると、そこにはゆっくり休めるベッドが幾つも置かれていて、あの重い荷物を持ってきた苦労を労い、マッサージなんてしてもらえて、気持ちいい風呂なんかに入れるんじゃないかとか。

しかしある仲間は、嘘か本当かわからない噂話をしだした。

ゲートを潜ると、そこは真っ暗な長い通路になっていて、その先にはやたらに赤い池があり、客は次々にそこへ入っていくそう。

そして客達はそこで歓喜のため息を吐きながら、どこかに消えていくらしい。などと。

皆はシーンとして、その話を聞いた後、へーっと関心したが、で

も噂だろっの言葉に、ざわつきながら笑いあつた。
しかし、本当は。

誰もがそのことに興味が沸いたのは確かだった。

入り口の向こうがバタバタとやかましくなった。

今夜もお出ましか。

俺は入り口の扉を大きく開けて客を出迎えた。

ピンクの客だ。

彼等はまず、賑やかで、これ以上の騒がしい客は他にはいないほどで、しかも匂いが臭かった。

それに加えて茶色や黄色の客がチヨビチヨビと混ざりながらやってきては、ピンクの客に寄りかかれて、迷惑そうだった。

ピンクの客は割と審査には時間が係らずに、あつと言うまにゲートを抜けて行く。

それだけ彼等の持つてくる書類と荷物の内容は、くだらないものなのだろう。俺達はいつもそう思うのだった。

しかし、今晚は久しぶりにピンクの客の量が多い。

そして途中から赤い客も凄い数に増えてきた。

ホールは嫌な匂いと熱さでかなり不快な状態になって、全くひどい有り様だ。

俺がポツリと、そう呟いた瞬間、仲間の一人が俺のところに駆け寄ってきて、こう言った。

今倉庫をまた増やすことが決定したらしい。

赤い客の荷物がまた溢れて、収まりがなくなつたからだそうだと。

そしてそう仲間が言い終ると同時に、出口の向こうの方から鈍い音で、ポコツと

いう例の音がした。

ヤレヤレ。

俺は飽きれて、客には気づかれないうにため息をついた。

このところの倉庫の増設が頻繁なのはいいが、そんな客の入れ方は後で身の破滅を招くかも知れないのに、オーナーはわからないのだろうか？

押し寄せる客。

溜る荷物。

俺がいつもの様にオーナーのことを心配し始めながら、それでも客の誘導を忙しく続けていると、今度は頭の上から何か鈍い音がした。俺は不意にその音の方に目をやり、体の動きを止めて、それを凝視した。

そんな俺に、客がつかれて立ち止まり、同じ様にその音の方を不思議そうに眺め、そのせいでホールは詰まり出してしまった。

そんなこちらの様子に気付いた仲間が、大声で俺を怒鳴ったが、やがてその声は異様なその音で掻き消された。

そしてその音の正体がみるみる内に広がり、ホールの中はパニックとなった。

なんと、それはホールの屋根に穴が空いた、と言うよりも破けたのだった。

客も合わせた誰もが慌てふためき、その内、仲間の一人が非常スイッチを押し、客はそっちへと吸い込まれ、俺達は必死になってその流れに耐え、そして叫んだ。

オーナー、いい加減に体を労れー！と。

目を覚ますと、俺は病院だった。

そこにいた看護師さんがそんな俺に気付いて、優しく笑った。

そして俺に、相当なストレスのせいで胃潰瘍を起こし、焼肉屋で倒れ、ここに運ばれたのだと教えてくれた。

そうか。

確かに最後の記憶にあるのは、酒を久々に煽って、しかも焼肉を調子に乗ってヤケ食いした風景。

そして急な痛みと吐き気。

どうやら身体に相当な無理を掛けていたらしい。

普段の食生活もほとんど何も気にすることなく肉ばかり食べていたし、その罰か。

そんな反省した表情の俺を見た看護師は、最近の不摂生からの体の傷みや、かなりの太り過ぎによるメタボ症候群についても、医者から指摘が出ている為、しばらく食事制限付きの入院となる事を俺に教えてくれた。

深いため息を吐きながら俺はまたベッドに身体を沈め、そして思った。

そろそろ俺も歳だ。

体を大事にしなくてはいけないという訳かな。

すると空腹でもないのに腹が突然、大きくグググと、返事をするように鳴ったのだった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げます。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3272e/>

ラブカクテルス その65

2010年11月16日15時51分発行